私の工夫

遊び込む幼児をめざして
―学びの芽生えを育む環境構成や教師の援助について―

井原市立荏原幼稚園
主任教諭　木山　阿紀子

1　はじめに

近年、子どもを取り巻く環境は大きく変化し、その影響が幼児にも及んでいる。コミュニケーション能力の低下、豊かな感情体験の不足、自制心や規範意識の希薄化などが課題となり、このことが、小学校に入学したときに学校生活への不適応を示す、いわゆる「小一プロブレム」を引き起す要因にもなっている。このような社会環境において、幼児期に心を動かして夢中になって遊び込むことが大切であると考える。遊び込んでいるときに、学びの芽生えも同時に育まれ、様々な力を獲得していく。その力は生きる力の基礎になり、幼稚園教育以降の教育につながるものである。そこで、本主題を設定し、「学びの芽生えを育む環境構成や教師の援助について」実践に取り組んだ。

2　研究の内容

◎研究主題の捉え方

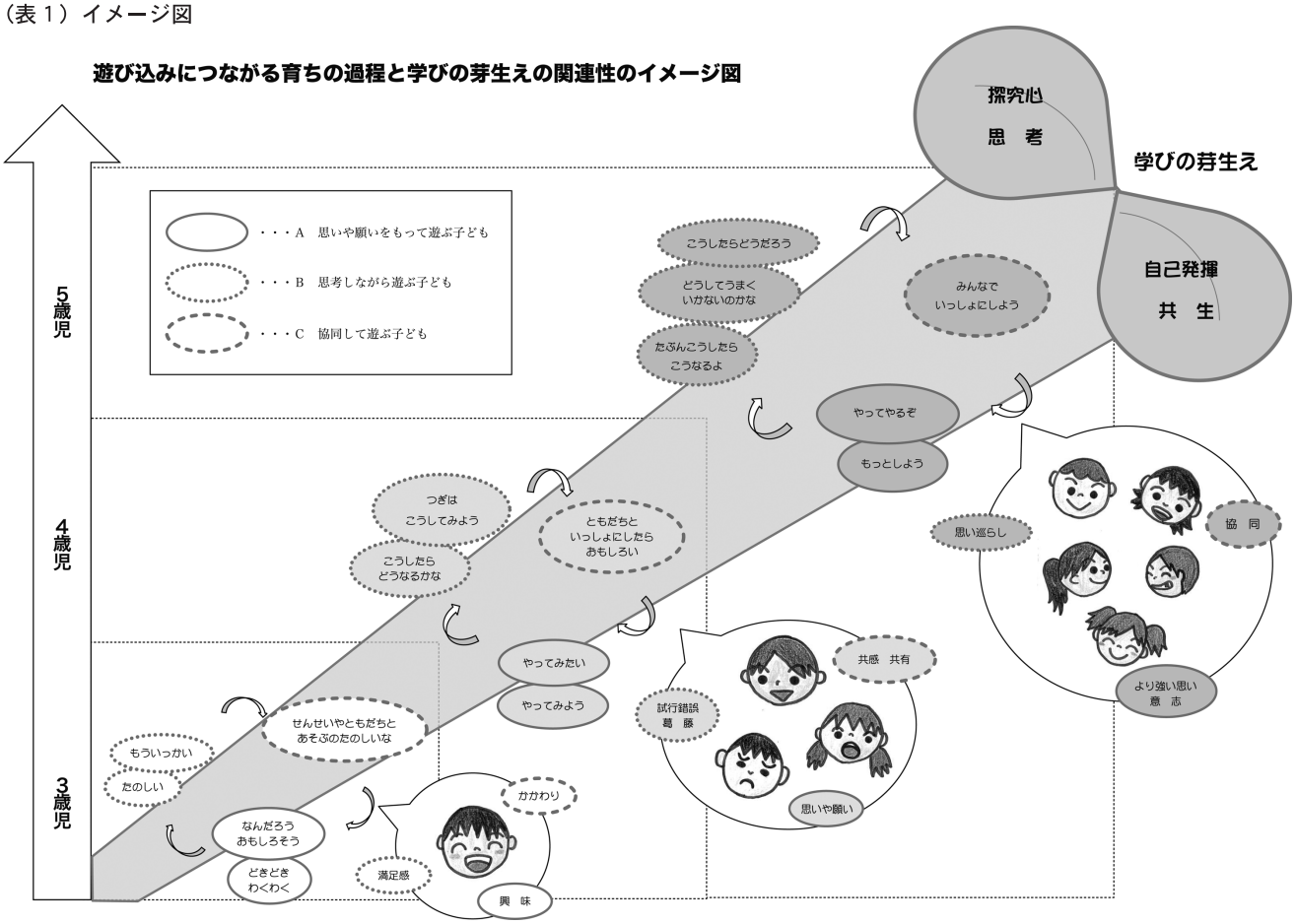
遊び込むとは、「おもしろそう」「やってみたい」と、子どもの内側から沸き起こってくる感情によって遊びが始まり、段々と思いや願いをもって遊ぶようになる。そして、思いや願いの実現に向けて、試行錯誤を繰り返しながら、様々なことに気付いていく。その気付きから新たな願いをもち、継続して遊びを展開していく。更に遊びをもっと楽しいものにしようと気付きや考えを伝え合い、協同して遊ぶようになる姿のことである。

学びの芽生えとは、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、様々なことを学んでいくことである。

このように捉え、めざす幼児像を

A思いや願いをもって遊ぶ子ども

（表１）イメージ図



B思考しながら遊ぶ子ども
C協同して遊ぶ子ども
と設定し、「遊び込みにつながる育ちの過程と学びの芽生えの関連性のイメージ図」を作成し、実践を積み重ねた。**（表1）**

◎実践にあたって工夫したこととと成果

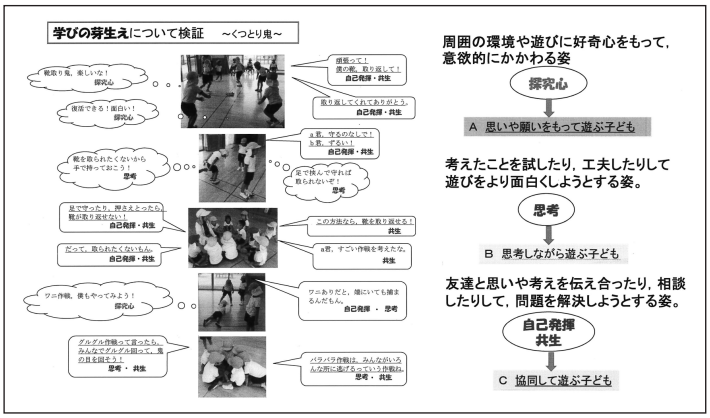
①めざす幼児像に対応する具体的な幼児の姿と環境構成や教師の援助について、3年間を見通して考え、一覧表を作成し、実践する。

一覧表をもとに、3年間の育ちを見通し、発達に応じた教師の援助や、適切な環境構成について共通理解を図ることができた。

②日々の保育についてカンファレンスを行い、職員同士が互いの考えに触れたり、新たな気付きをしたりしながら、遊び込みにつながる環境構成の工夫や教師の援助のあり方を探る。

カンファレンスでは、遊びの様子をもとに、教師間で遊び込みにつながる姿や遊び込んでいる姿を共通理解し、翌日の環境構成や教師の援助に生かすようにした。話し合ったことを遊びの環境図に記入し、カンファレンスに参加できない職員も分かるように記録に残した。カンファレンスを積み重ねていくことで、教師間で明確なねらいや見通しをもって保育することができるようになった。また、幼児が試行錯誤できるような環境構成や、幼児の気付きや発見を大切にした援助を行うこともでき、遊び込む姿につなげることができた。

③遊び込むことが学びの芽生えを育んでいることを、事例を通して検証する。



学びの芽生えについて検証

検証する中で、学びの芽生えの具体的な姿について研修を深めることができ、学びの芽生えを意識して保育をするようになった。

3 まとめ

一人一人の実態や興味を捉え、思わず心を動かしてかかわりたくなる環境を設定するとともに、幼児の興味や関心・願いに応じて環境の再構築をしていくことが大切であった。また、幼児が思い付いたことや考えたことを試せるような柔軟性や多様性のある題材や、用具・素材を環境に取り入れ、その環境にじっくりかかわれる時間や場を保障することも大切であった。そして、幼児が思いの実現や課題の解決に向けて試行錯誤したり思いを巡らせたりするためには、教師も一緒に考える姿勢を示し、状況に応じて幼児が考えられるようヒントを出し、うまくいく方法や方向性を見いだせるようにすることが効果的であった。

幼児が思いを伝えたり、友達の考えに触れたり、目的を共有したりするために、振り返りや話合いをもつことは欠かせない援助であった。話合いを支え、目的に向けて方向性をもつ手助けをすることが、自分たちが課題の解決方法を見いだしていくことにつながった。

今後も、遊び込むことを通して学びの芽生えを育み、幼稚園以降の教育につながるよう、引き続き研修や実践を深めていきたい。

試行錯誤しながら作った泡でケーキやかき氷，カレーライスなどを作り，年少児に紹介している様子

遊びの振り返りを通して，楽しかったことを共有し，明日の遊びについて話し合っている場面